

広島県安芸太田町におけるシノリガモ *Histrionicus histrionicus* の観察記録

森本 栄・渡辺健三*

日本野鳥の会広島県支部

The Record of the Harlequin Duck, *Histrionicus histrionicus*, from Akiota-cho, Hiroshima Prefecture

Sakae MORIMOTO and *Kenzo WATANABE

報告

シノリガモ *Histrionicus histrionicus* は、バイカル湖から東のシベリア北部、サハリン、カムチャッカ半島、北アメリカ西海岸の中北部、カナダ西部、グリーンランド南部などで繁殖し（高野 1981）、日本にはおもに冬鳥として九州以北の岩礁の多い海岸に渡来する（高野 2007）。

北海道および東北地方の山間溪流で繁殖するが（桐原ほか 2009, 真木・大西 2000）、日本での繁殖は、本種の繁殖南限の個体群と考えられる（柳澤 2002）。繁殖地は宮城県以北で、宮城県栗駒山、青森県白神山地、北海道十勝川で少数が数カ所で知られている。東北地方以北のシノリガモ繁殖個体群は、地域的に孤立しており、地域レベルでの絶滅のおそれが高い個体群として、「絶滅のおそれがある地域個体群（LP）」に指定されている（環境省自然環境局野生生物課 2002）。

中国地方では、山陰海岸の鳥取県鳥取市賀露海岸や島根県益田市高津川河口などで、少数の個体群が越冬していることが知られているが、鳥取県では、絶滅危惧Ⅱ類（VU）に指定されている（福田 2012）。広島県内では、1980年代、広島市南区似島、広島市八幡川河口など、沿岸部で3例の観察例があるのみで（日本野鳥の会広島県支部 2002）、内陸部の記録はみあたらない。

筆者らは、2010年冬、広島県山県郡安芸太田町においてシノリガモを観察した。本種が西中国山地で観察されることは稀であり、発見地の環境や垣間見られた生態等について報告する。

2010年1月17日、筆者のひとりの森本が、安芸太田町の太田川で、2羽のシノリガモを発見した。現地は、急峻な山地に囲まれた太田川上流域で、付近には小集落と耕地がある。発見地は、大きく蛇行した溪流で、平均水面幅約17mの流れには、大小の岩やれきが散在しており、流速は早く、水面は泡立ってしぶきを上げていた（図版1-A）。宮城県栗駒山麓の繁殖地は、ブナ林に覆われた水面幅6～10m水深20～100cm程度の岩やれきが散在する谷あいの狭い急流（佐藤・小湊 1988）であるが、安芸太田町の発見地は、繁殖地の環境と共通する要素がある。

発見したシノリガモは、オス・メス各1羽で、オスは、羽色全体に褐色味があり、頬の白斑の後方に不明瞭な縦長の白斑が見られ、胸側には縦状の白斑が見られた。オスの成鳥には大雨覆先端に顕著な白斑があるが、この個体は斑らしきものすら見られず、形態的特徴から、第1回冬羽の若鳥と認められた。メスの成鳥は目先の上下に白斑があり、上下の斑は繋がっているが、発見したメスは、目先下部の白斑が薄く、目先上部の白斑も、メスの成鳥に比べて著しく小さく不明瞭であった。また、外側尾羽の先端がすり切れ、V字型の切れこみがある等、カモ類の幼羽の特徴（山階鳥類研究所鳥類標識センター 2009）が見られたので、若鳥と思われる（図版1-B）。

2羽のシノリガモは常に行動を共にしており（図版2-A）、泳ぎながら頭部を水中に入れて餌動物を探し、倒立採餌や潜水採餌を行っていたが、潜水時間は5～10数秒と短かった。

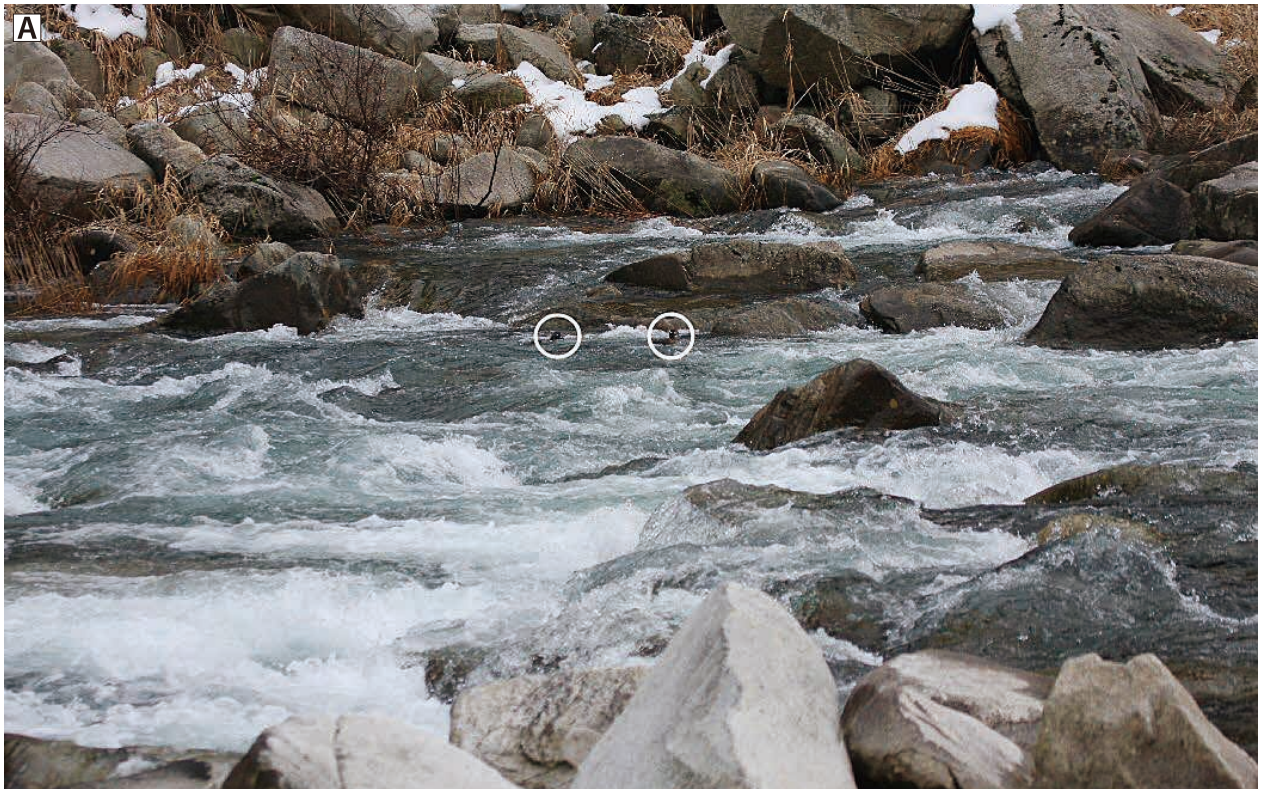
Bengtson (1972)によると、繁殖期におけるアイスランド個体群の餌動物は、ブユ・ユスリカ・水生昆虫の成虫や幼虫が主とされ、国内繁殖地の溪流では、水生昆虫・藻類・ブユの幼虫を良く採食する（環境省自然環境局野生生物課 2002）としている。明確に餌動物は特定できなかったが、冬期の溪流は、カゲロウ目・トビケラ目・カワゲラ目の水生昆虫の幼虫が大きく成長していることから、水生昆虫を捕食していた可能性が高い。行動域は約500m範囲内と比較的狭く、上流部に進行する場合は、採餌しながら移動することが多く、餌場を移動する時は、急流部を利用して一気に下流に下り、鳴き声は発せず、飛立つことはなかった。落差の大きい流れで潜水採餌をすることが多く、泳ぎながら直接頭かきを行い、しばしば流れ中央部の岩に上がり、羽ばたきや身震い、胸腹部や三列風切を嘴でしごいて水切りするなど、整羽した後、休息（背眠）する姿が見られた（図版 2-B）。

1月24日、同所でオス・メスを観察したが、オスはこの日を最後に確認していない。2月7日、同所でメスを観察したが、以後、メス個体は確認されず、移動したものとされる。

冬期の本種は、波の荒い岩礁や磯のある海岸やその周辺の沿岸に生息し、海底のカニ類や貝類等を採食するが（柳澤 2002）、筆者等が調べた範囲では、山地の溪流で越冬した記録は確認できなかった。安芸太田町の記録は、越冬地に向かう途中の若い個体が一時的に立ち寄ったものと思われるが、冬期、西中国山地の溪流で22日間の滞在を確認できたことは、この種が山間溪流で越冬する可能性を示唆するもので、今後、注意が必要である。シノリガモの国内移動ルートは殆ど解っていない。安芸太田町の記録は、中国地方の山間溪流を中継地として利用している数少ない観察例であろう。十分な観察はできなかったが、生息環境や生態面で若干の知見を得た。出会う機会は少ないが、今後も調査を継続し、本種の保全に役立てたい。

引用文献

- Bengtson, S.A. (1972) Breeding Ecology of the Harlequin Duck in Iceland, *Ornis Scandinavica* 3:1-19
- 福田紀生(2012) シノリガモ。レッドデータブックとっとり改訂版—鳥取県の絶滅のおそれのある野生動植物—：42。鳥取県生活環境部公園自然課
- 桐原政志・山形則男・吉野俊幸(2009) 日本の鳥 550 水辺の鳥増補改訂版。文一総合出版
- 真木広造・大西敏一(2000) 日本の野鳥 590。平凡社
- 日本野鳥の会広島県支部(2002) ひろしま野鳥図鑑増補改訂版。中国新聞社
- 佐藤広巳・小湊郁夫(1988) 栗駒山麓一迫川におけるシノリガモの繁殖とその生態。 *Strix* 7: 159-176
- 高野伸二(1981) シノリガモ。日本産鳥類図鑑：231。東海大学出版会
- 高野伸二(2007) シノリガモ。フィールドガイド日本の野鳥増補改訂版：54-55。日本野鳥の会
- 山階鳥類研究所鳥類標識センター(2009) 鳥類標識マニュアル(改訂第11版) 2008年度版。山階鳥類研究所
- 柳澤紀夫(2002) シノリガモ。改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック 2— 鳥類。自然環境研究センター



A: 発見地の景観. ○印がシノリガモ
B: シノリガモ (左: オス・右: メス)

2010年1月20日
2010年1月20日



A: 常に行動を共にするシノリガモ
B: 岩上で休息するシノリガモ

2010年1月20日
2010年1月20日